OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方言の語彙
Author(s)	徳川, 宗賢
Citation	阪大日本語研究. 1991, 3, p. 95-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

方言の語彙

On the Study of Japanese Dialects Vocabulary

徳川宗賢

TOKUGAWA Munemasa

キーワード：方言量，孤例，『日本方言大辞典（SDJD)』，
『日本言語地図（LAJ)』，『物類称呼（BS)』

1. はじめに

方言の語彙については，日本語の研究に際して，隠語や幼児語などと同じく，ふつう除外して考えることが多い。しかしそれらがれっきとした日本語の語彙であることは当然である。男性のことばのみを扱って女性のことばを無視しては十全の研究とは言えないのと同様に，方言の語彙を除いては過不足のない日本語研究とは言えない。そう誰もが考えていると信ずるものである。しかし現実には，その研究に関して未開拓な部分がきわめて大きいのである。

方言の語彙へのアプローチとしては，まず収集がある。その成果は各地の方言集や方言辞典としてまとめられる例が多く，小規模なものもあれば大規模なものもある。そしてその延長線上に，特定方言に関する方言語彙の総体を対象とする研究が考えられる。主として共時的研究となろう。特定方言の語彙の総体の研究としては，各語の使用率，品詞構成，和語や外来語の比率，造語法の傾向，さらに語音構成の特徴，語の長さ，意味の分布など，標準語研究でならあたりまえの研究テーマに関して，未開拓な世界がひろがっている。特定方言の語彙の総体の記述としていちおう理想的なものに，国立国語研究所『沖縄語辞典』，長田須磨・須山名保子・藤井美佐子『奄美方言分類辞典』，仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』，藤原与

一『瀬戸内海方言辞典』がある。それぞれ代表的個人のイディオレクトの網羅的記述であり，今後さらに全国的に10種，20種の追加が望まれる。

一方，ある特定の標目に関する各地の表現の収集もある。戦前には風の名，星の名，魚の名などに関する大きな成果があった。倉田悟『日本主要樹木名方言集』や辛川十歩・柴田武『メダカの方言』などがそれらをつぐものである。そして特定の標目に関する各地の表現の相互比較の延長線上に，方言の地理的分布を扱ういわゆる方言地理学がある。地図の作成を通じて史的研究に向かうのが普通である。すでに多くの方言地図が公刊されているが，ここでは国立国語研究所『日本言語地図』をひとつだけあげておこう。全国規模のものの追加調査は，もはや手遅れなのであろうか。

そのほかに，日本の方言語彙全体を視野におさめる研究があろう。具体的な研究はまだこれからであるが，徳川宗賢・佐藤亮一『日本方言大辞典(以下 SDJD と略す)』が基本的な文献となる。

方言語彙の研究に関する単行本としては，別に日本方言研究会『日本方言の語彙』，平山輝男『全国方言基礎語彙の研究序説』，広戸惇『方言語彙の研究』，藤原与一『民間造語法の研究』，室山敏昭『生活語彙の基礎的研究』などが思い浮かぶ。この分野の研究は，けっして不振なわけではない。

2. 多彩さと活力

以下，方言の語彙について SDJD を通じてその実態を例示し，その多彩さと活力を理解していただく糸口としたい。

シャクシマイ　長崎県対馬の語である。今までしたことのないことを初めてする意という。いわゆる初体験ということである。

コクズリイル　名古屋市のことばで，時間を超えて取り組んでいるが，幾分不器用さもあって苦しんでいる状態にある，という意味だという。こんな特殊な概念に対する語が，現実に存在するのである。

リョジンオドシ　福岡市のことば。知恵があるように見える愚者のことという。とても一語で表現できそうには思えない概念である。

クンダリムク　これも福岡市のことばで，意味は無遠慮に上座に座る，

ということだそうである。

ガンズ　青森県津軽のことばで，毛虫をつぶした時に出る汚い中身をさすという。

アワセ　同名の者同士，ということ。ただし，姓には関係がないとのことである。岩手県気仙郡のことば。

ヨアビ　鹿児島県肝属郡のことばで，乳児が眠りながら笑顔を作ること，だそうである。

以上は，そんな意味をあらわす単語が実際にはあるのか，宙にはとても思いつかないような例を，任意にピックアップして挙げてみた。方言語彙の世界の多彩さの一端を示したつもりである。もしこれらが各地で創造された語だとすれば，方言社会はまことに活力に満ちた世界ということになる。

ついで，意味の展開をめぐっておもしろそうな例を拾ってみる。

ウセル　ブランチの　⑦　行く。去る。ののしり語として用いられることが多い，とあり，使用地域は，埼玉県秩父郡，新潟県から高知県，長崎県，大分県までとある。また　⑧　来る。ののしり語として用いられることが多い，とあり，使用地域は，新潟県，山梨県から高知県，長崎県，大分県までとある。さらに　⑨　居るを卑しめて言う語，とあり，使用地域は，山梨県から徳島県とある。尊敬語のイラッシャルやオイデニナルにおける意味の中和が思い出される。

トドイ　①　満潮。高知県，②　干潮。岡山県御津郡，広島県走島，③潮合い。広島県，とある。ウセルの場合の意味の展開と通ずるところがある。

ヤマセ　第1図のやませのブランチの⑧から㉑までを見てほしい。ありうる16方向のうち，報告されていない風位は西北西の風と北北東の風だけである。ヤマセが，風向きによっては一般的に説明できない風であることがわかる。

わずかしか挙げられなかったが，以上は，方言において意味の展開がきわめて自由闊達なものであることを示す例であった。反対の意味を表すこ

やませ【山背】①山の方から吹く風。山風。石川県能美郡012 鹿島郡411 島根県725 文献例弁乳母集「勝ち負けの弓のやませに散花をまといの外の人も見よかし」《やまじ》島根県那賀郡・浜田市725《やまで》静岡県榛原郡・賀茂郡521 ②陸から沖に吹く風。《やまで》静岡県静岡市054 志太郡521《やまて》静岡県賀茂郡521 島根県益田市・隠岐島725 ③梅雨時に夜明けごろ陸から沖に向かって吹く風。岩手県気仙郡102 ④山から吹く突風。《やまぜ》愛媛県840 ⑤冬期、時雨に伴って吹いて来る風。《やまぜ》長崎県五島917 ⑥あらし。山形県飽海郡141 ⑦南寄りの暴風。《やまじ》香川県827 ⑧東風。津軽※035 羽後能代※053 北海道函館067 青森県073 084 新潟県佐渡359《やまへ》青森県(これが激しい年は凶作になる)082 844《やまひ》青森県073《やまじ》愛媛県温泉郡844《やませかぜ「一風」》新潟県佐渡、やませかぜと商人は内へ入れるな」359 ⑨東南東の風。《やまじ》広島県安芸郡783《やまじごち「一東風」》広島県御調郡844 香川県高見島827 愛媛県越智郡844 ⑩東南風。北海道065 新潟県佐渡351 石川県河北郡・金沢市404 鳥取県東伯郡711 島根県安濃郡844 岡山県浅口郡844《やませ》三重県南牟婁郡603 兵庫県淡路島671 岡山県浅口郡844 愛媛県温泉郡844 高知県安芸郡844《やまじ》島根県那賀郡・江津市(四月ごろ吹く風)725 岡山県725 広島県771 786 844 山口県笠戸島・屋代島・浮島054 玖珂郡844 香川県綾歌郡829 島嶼054 844 愛媛県越智郡・西宇和郡844 大分県西国東郡844《やまて》島根県益田市・隠岐島725《やまじごち》岡山県児島郡・前島・真鍋島014 香川県島嶼014 829 愛媛県越智郡844 安居島844《やましかぜ》愛媛県越智郡844 ⑪南南東の風。《やまじ》香川県豊島014 ⑫南風。京都府竹野郡(十二月ごろ吹く風)「秋のやませは雪をよぶ」622 島根県八束郡(秋に吹く風)844《やませ》三重県北牟婁郡(激しい南風)054 志摩郡585 兵庫県淡路島671 愛媛県伊予郡844《やまじ》島根県石見(八月ごろ吹く風)725 岡山県邑久郡・島嶼014 広島県走島771 豊田郡844 山口県向島・祝島054 香川県054 829 愛媛県840《やまで》兵庫県赤穂郡660 山口県徳山市・大津島803 ⑬南南西の風。三重県志摩郡001《やまじ》広島県向島771 香川県男木島014 愛媛県東宇和郡844 ⑭西南風。千葉県海上郡261 鳥取県八頭郡(冬吹く風)012 西伯郡712《やまぜ》茨城県稲敷郡188 静岡県浜名郡545 愛知県愛知郡563 知多郡569 三重県志摩郡585 兵庫県淡路島671 印南郡844 和歌山県690 徳島県板野郡844 香川県大川郡844 高知県安芸郡844 大分県中津市844《やまじ》島根県浜田市725 岡山県児島郡763 北木島844 広島県佐木島054 能美島771 山口県大島801 吉敷郡844 香川県塩飽諸島・粟島829 愛媛県843 844 高知県幡多郡844 大分県941 宮崎県南那珂郡844《やまで》和歌山県日高郡698《やまじごち》香川県小豆島829 ⑮西南西の風。島根県能義郡844《やまぜ》香川県「やませごろたら秋になる」829《やまじ》愛媛県北宇和郡844 ⑯西風。《やまじ》島根県那賀郡・浜田市725 岡山県北木島054 香川県小豆島・直島829 ⑰西北風。《やまじ》島根県美濃郡725《やませかぜ》青森県西津軽郡073 ⑱北北西の風。高知県安芸郡844 ⑲北風。秋田県南秋田郡012《やまじ》島根県美濃郡725《やませかぜ》青森県西津軽郡073 ⑳東北風。山形県飛島140 新潟県岩船郡(冬から春にかけて吹く風)362《やまへ》青森県三戸郡「やまへが吹くとしけになる」083《やまひ》青森県津軽「此のやまひおこねでえ(恐ろしい)」073 ㉑東北東の風。岩手県九戸郡088 ㉒海岸一帯に高潮の押し寄せる風。《やまじ》広島県安芸郡786 ㉓つむじ風。旋風。《やまじかぜ》香川県三豊郡829 ㉔南西の方角。《やまぜ・やませどこ》静岡県浜名郡545《やまじ》愛媛県新居郡845 ㉕秋、寒くなってから急に降って来る暖かい雨。《やまで》三重県飯南郡590 ㉖(風に伴って起きるところから)大きな波。新潟県佐渡357 ㉗(東南風が古来より険悪な風とされているところから)女性のヒステリーなど。北海道《やませ吹いている」065

第1図

とさえある。これらも方言の多彩さと活力を示しているものと言ってよかろう。

以下は，方向をかえて，報告されている使用地域を通じて物を思わせる例を，いくつか挙げてみよう。

ヨダキー　「源氏物語」にも使用例のあるこの語は，SDJD を引くと，ヨダキーだけならば使用地域は兵庫県美方郡，鳥取県以西，四国，九州に至る西日本に限られるが，ヨダケルという動詞形になると岐阜県本巣郡で使われているとある（別に兵庫県加古郡でも）。五段活用なのか下一段活用なのかはっきりしないのは残念であるが[1)]，そして東日本におけるわずかな残存例ながら，その周圏的分布から，

いまは国の中心では使われなくなったが，過去のある時代，中央語が東西に影響を及ぼしていたことを推測することができる。

ヨシベ　人をだますこと。詐欺。岐阜県飛騨，和歌山県日高郡，徳島市，香川県，とある。この分布から，この表現が一時期中央でも使われていたことが推測できる。『日本国語大辞典』には大正期の『隠語輯覧』が挙がっているが，もうすこし古い時代に中央でかなり広く使われていたのではあるまいか。

ハドイ　敏捷だ。さとい。新潟県東蒲原郡，徳島県，香川県。《はどこい》徳島県，とある。『日本国語大辞典』には見られない語であるが，本当は中央でも存在していたのではあるまいか。

ヨーゴ　【接尾】思う存分にすることの意を表す。放題。程。愛知県名古屋市「無理のいいたいようご」「食いたいようご食った」《よご》島根県隠岐島「思うよご」，とある。これも『日本国語大辞典』によるかぎり文献例の見られない表現である。これから捜せば用例を見つけられるのかもしれないが，中央でも使われていたのに，文献に記録されることがすくなかっただけのことではないか，と考えられる。このような忘れられた日本語はまだまだ多いに違いない。

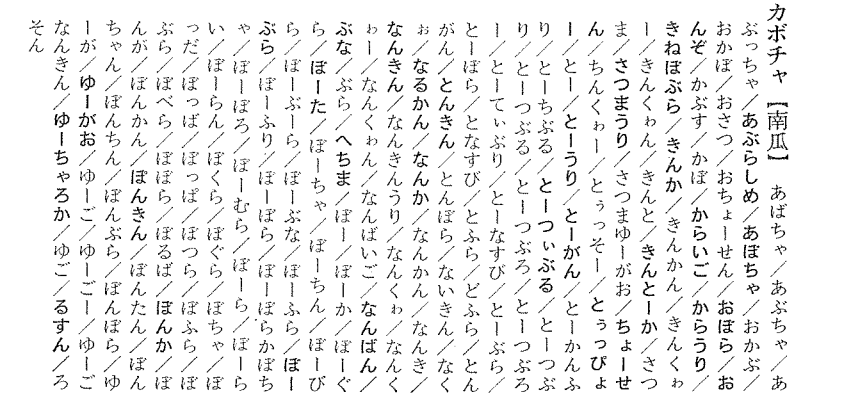
以上，SDJD から思いつくままに例を挙げて，いくつかの角度から方言の語彙なるものの片鱗を紹介した。勘違いが含まれているかもしれないが，SDJD の面白さの一端がわかっていただければ幸いである。同辞典の利用法は，このほかにもいくらでもあるはずである。

3.　方言量（その1）

ここでは『日本方言大辞典』（SDJD）によって方言量について考えることにする。この術語は柳田国男の提案によって流布したもので，ある標目をめぐる方言変種の量をいう。彼岸花1000種，目高5000種などと言われていることは，すでに周知のことであろう。

もっとも具体的に方言量を考えようとすると，いろいろの問題が生ずる。ここでは第2図としてSDJDの索引から南瓜の項を例として示してみた。

例を見ればわかるように，あばちゃ，あぶちゃ，あぶっちゃをそれぞれ別形として数えるのか，それともこのSDJDがそれらの代表形として立てたあぼちゃ（図では太字となっている）を1とし，他はそれに含まれるものとして数えるのかが，まず問題となる。きんか，きんかん，きんくゎー，きんくゎんをそれぞれ別形として数えるのか，それともそれらの代表形としてのきんかだけを数えるのか，ということである。



第2図

本来はケースごとにひとつひとつ具体的に検討して結論を出すべきことかもしれない。しかしここでは，便宜的にこの辞典が代表形として索引に太字で示した語形のみをカウントすることにした。その結果南瓜の方言量は，結局29ということになる。

では，SDJD 全体を通じて見たとき，方言量の多い標目とはどういうものなのであろうか。第1表を見てほしい。ここでは第1位方言量300の＜沢山＞から第60位方言量76の＜死ぬ＞までを示してみた。（ ）内の数字がそれぞれの標目の方言量である。

この表によって，方言量の極めて大きい標目にどんなものがあるかが概観できる[2)]（この表の作成については，大阪大学日本学科言語系の第1期生の学生たちの力によるところが極めて大きかった。記して感謝の意を表する）。

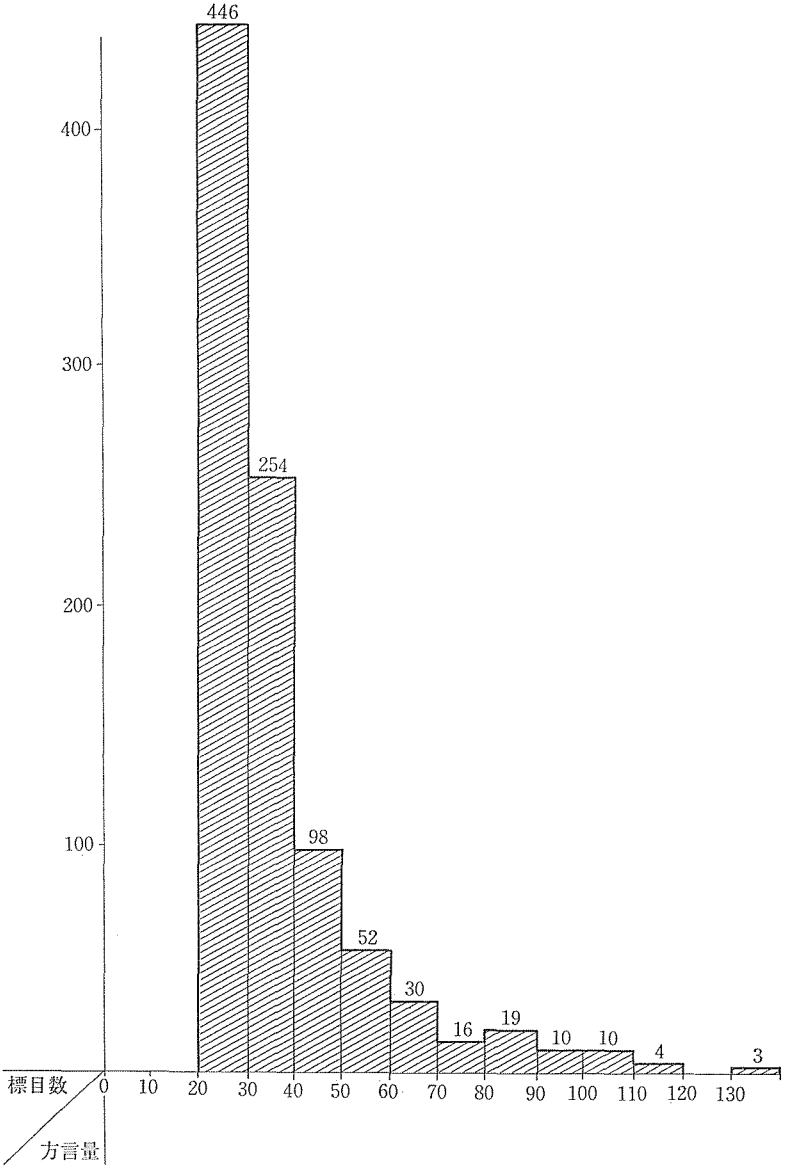
1	沢山（300）	21	虎杖（105）	41	苛める（87）
2	吝ん坊（293）	22	里芋（104）	41	露草（87）
3	彼岸花（195）	22	馬鈴薯（104）	43	人を罵る語（87）
4	馬鹿（181）	24	馬鹿者（103）	44	蚕豆（86）
5	蟻地獄（175）	25	隠元豆（102）	45	殴る（85）
6	目高（165）	26	からかう（98）	46	蝸牛（84）
7	怠け者（151）	26	非常に（98）	46	下水溝（84）
8	対称代名詞（145）	28	全く（97）	48	度々（83）
9	お手玉（140）	28	下水（97）	49	すっかり（82）
9	嘘（140）	30	叱る（94）	50	痘痕（81）
11	飴ん坊（126）	31	お喋り（93）	50	飯事（81）
12	蟇蛙（117）	31	食いしん坊（93）	52	何時も（80）
13	吝（116）	33	石拳（92）	52	さるとりいばら（80）
14	蟷螂（115）	34	台所（90）	52	つくねいも（80）
14	大層（115）	34	臆病者（90）	55	蓋（79）
16	お玉杓子（109）	36	河鹿（89）	55	全部（79）
17	お転婆（108）	36	出鱈目（89）	57	鬼事（77）
18	水澄まし（107）	36	巫山戯る（89）	57	打つ（77）
19	（表裏などの）逆（106）	36	私生児（89）	57	片喰（77）
19	片足跳び（106）	39	鶺鴒（88）	60	死ぬ（76）

第1表

4. 方言量（その2）

では，60位以下はどうなっていくのか。第1表によって，方言量90以上99以下のものは10項，80以上89以下のものは19項あることがわかる。以下を示せば次の通りである。70以上79以下は16項，60以上69以下は30項，50以上59以下は52項，40以上49以下は98項，30以上39以下は254項，20以上29以下は446項。以上で950位までとなる。方言量19以下の世界はもはやよくわからないが，第3図のグラフによってその大略を推測することができる。[3)]

このことによって，この点をぜひ確認しておきたいのであるが，方言の語彙は一面きわめて多彩でありながら，方言世界でも反面あまり多彩でない部分が結構広大であるということがわかってくる。多彩な部分は，限られているのかもしれない。また，このグラフからただちに想像できるところであるが，当然方言量1，つまり全国にまったく地域差の見られない標


446
254
98
52
30
16
19
10
10
4
3
400
300
200
100
標目数
方言量
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
110
120
130

第3図

目の存在が推測され，ではどういうものが全国一様なのかに関心が向かうことになる。

方言研究に従事していると，方言差のきわだつ分野に目が向くし，ことに自身の狭い生活圏の中にも方言差の見られる分野（つまりそのほとんどは方言量の多い分野）にまず関心が向きがちとなる。そしてそうした立場からは，一般的にどういう概念について方言量が多いかが問題になりやすい。それはそれで自然なことでさらに探求してしかるべきであるが，ここでは，その逆の方向への関心も無視できないことを強調しておきたい。妙な比喩になるが，医学は病気に関心を示すのと同時に健康にも興味を向けることが望ましい，という話と似てはいないだろうか。

さらにいえば，方言量が歴史的所産であることに鑑みて，方言量は，歴史量（歴史時代を通じて変化のないものは1，歴史時代に変化を繰返したものは歴史量が多い，ということになる）との対比が，当然試みられてよい。以前こうした側面をいささかでも開拓してみようとしたことがある（徳川宗賢「日本語基盤語彙への接近」1989年，『日本研究―言語と伝承』所収）。しかしまだ極めて不十分である。

方言量をめぐっては，別に，a．日本語以外の言語ではどうなっているか，その比較がおもしろそうだ，b．方言変種の多彩な地方とあまり変化のはなはだしくない地方がありそうだ。標目ごとに特色がありそうで，なぜそうなるかがまず考えられてよく，また地域の一般傾向についても，柳田国男のいう辺境現象（『蝸牛考』）なる概念をもとりこんでさらに考えるべきだ（極端には，方言量2の場合，同じ2でも，一方に日本が大きく2分されるものがあり，他方に日本全土がほぼ一様であって例外的にポツンと別の表現が加わるものがある，という話に通ずる），c．たとえば幼児語（育児語）の世界の多様性と方言世界の多様性は，標目においてどうも一致しないようである。これが何を意味するのか，社会方言学の出番がありそうだ，の以上3点を付け加えておこう。

5. 『物類称呼』『日本言語地図』との比較　—氷柱の場合—

SDJD を利用する研究として考えられるものに，まず，『物類称呼（以下 BS と略す）』や『日本言語地図（以下 LAJ と略す）』との対比がある。そのほか上記の BS や LAJ 以外の，たとえば，『源氏物語総索引』，『新明解国語辞典』，『全国方言辞典』，『全国方言基礎語彙の研究序説』といった各種の文献との比較，さらに方向をかえて，広域のものから極く分布の狭いものに至る SDJD 各項の分布パタンの研究，などが考えられるが，いまは機会を改めることとする。

BS との比較では，まず200年間の方言の推移が問題になる。ついでこの比較によって，BS の方言資料としての性格がいささかなりと明らかになる希望がある。LAJ との比較では，両者の対比によって SDJD と LAJ のそれぞれの資料的性格が一般的に明らかになる点が，もっとも重要であろう。以前大岩正仲氏は東条操古稀記念会『日本方言地図』の刊行にあたって「踵」の方言分布地図を作成した。大岩氏の利用した資料はおおよそ SDJD に反映していると考えられる。LAJ 作成時に，大岩氏の地図と対比しやすいように我々はその地図を作った記憶がある。今回のSDJDの公刊によって，多数の項目について，誰もが自由に対比できる時代になったわけである。

ここでは，具体的には，「氷柱」を例にして考察する。BS については第 4 図を見てほしい。この比較については，すでに『日本の方言地図（中公新書）』で極く簡単に扱ったことがあるが，今回は，BS の掲げる語を手掛りにする方向から，すこし深入りしてみ

氷柱

つらゝたるひ　○越後にて○かな氷（こり）と云　奥の津軽にて○しがまといふ　同南部にて○堕（だ）氷（う）と云　仙台にて○たるひと云　会津及信州辺にて○すごほり（ヲ）といふ　西国及近江辺にて○ほだれと云　下総にて○とろろ|といふ　下野にて○ぼう|がねと云　伊勢白子にて○かなごと云　出羽最上にて○ぼんだらと云　氷柱垂氷の説有　略す

第4図

たい。

カナコリ——SDJD では，カナコリの使用地域を，BS の挙げる越後のほか，山形県，福島県会津若松市，新潟県東蒲原郡，三重県飯南郡としている。三重県のものがちょっと飛びはなれている。もっとも，カナコリのほかに，カナコーリ，カナゴーリ，カナゴリ，カナッコーリ，カナッコリ，カナックーリ，カナクイ，カナンコーリ，カナンコリ，カナンコリン，カネコーリ，カネコリ，カネッコーリ，カネッコリ，カネックリ，カネンコリ，カネンクリなどの関連語形があわせて表示されており，それらの使用地域は，山形，福島，群馬，新潟，長野，岐阜，愛知，三重，鳥取，島根，広島，大分，熊本の各県にまたがっている。さらにカネコロを加えれば富山が，カンコーリを加えれば愛媛が，カンコリを加えれば北海道と千葉が，カンコロを加えれば東京都三宅島が，それぞれ使用地域の範囲に含まれることになる。したがってカナコリの三重県は，それほどかけはなれたものではないことがわかってくる（別に，カネコリ，カネコーリの類の意味を「氷柱」でなく「氷」の意味にずらすなら，千葉，富山，石川，岐阜，静岡，三重，京都，大阪，奈良，兵庫，鳥取，島根，岡山，広島，香川，愛媛，高知，大分，宮崎，熊本，長崎の各府県がその使用地域となって，「氷柱」の場合と，分布についてもずれの生ずることがわかってくる。さらに氷ではあっても特に「夏の食用にする氷」の意味に限定すれば，和歌山県もその使用地域になるという）。

LAJ の 262「氷柱」の図では，これらカネコリ，カネコーリの類の語形の分布の中心が新潟（佐渡を除く），富山の両県であり，それに周囲の山形，福島，群馬，長野，岐阜の各県の一部を加えて，その領域が大きくひとつにまとまっていることが一目瞭然となる。そして北海道，東京都八丈島，岐阜（南部），三重，鳥取，島根，岡山，広島，山口，愛媛，宮崎の各県に見られるものは，相対的に極めて微弱なものであることが明らかになる（261「氷」の図を見ると，カネコリ，カネコーリの類の分布は，SDJD と同様に262図との間に差があり，262図の新潟，富山両県を中心とする大領域は富山県から岐阜県北部にかけてという形に縮小し，そのかわり千葉，

三重，香川，宮崎の各県には，「氷柱」の場合よりかえってはっきりした分布領域が現われてくる)。

結局，BS が地理的分布上代表的な新潟県をきちんと捉えていることは注目してよく，SDJD は LAJ の記録していない千葉，愛知，大分，熊本での使用を拾い上げており，この辞典が1950～60年代の LAJ より一世代以上古い方言を記録している可能性を示唆している。LAJ は，それぞれの語の分布領域を，他の対立する語との関係で捉え，輪郭をきちんと表示している点で優れていると言っていい。

シガマ——SDJD では，シガマの使用地域を，BS の津軽のほか，青森県と秋田県山本郡としている。別に関連語形としてスガマがあり，青森県津軽と秋田県鹿角郡を使用地域とする。シガマとスガマは，同語の異表記と考えてよろしかろう。SDJD では，別に秋田県山本郡にシガウマという異形があるとする。なお SDJD ではシガマと関係の深いシガ，スガについては，北海道，青森，岩手，秋田，山形，福島，茨城にかけての地域を使用地域とし，その範囲はシガマ，スガマよりずっと広い（シガマ，スガマを「氷」の意味で使う地域として，SDJD は青森，秋田の両県を挙げている。そして「氷」の意味のシガ，スガは，北海道，青森，岩手，宮城，秋田，山形，新潟，福井の各県で使われているとする)。

LAJ の 262「氷柱」の図は，シガマ，スガマが，北海道，岩手，山形のそれぞれ一部を含んで青森，秋田の両県にまたがるシガ，スガの大分布領域の中に，これまた両県にまたがってこじんまりとまとまって分布していることを明確に示している。そしてこの北奥のシガ，スガの領域と福島，茨城，栃木の各県にかけて見られるスガ（スガンボー）の領域とは，はっきり分離していることがよくわかる（261「氷」の地図におけるシガマ，スガマの分布は 262 図の場合とほとんど同じと言っていいが，シガ，スガについては，岩手，宮城，山形，福島，茨城にかけて著しく違っていることがよくわかる)。

以上をまとめてみよう。BS がシガマの領域として津軽を挙げていることは，まことに適切と言っていい。SDJD で秋田県山本郡をシガマの使用

地域とするのは，やはりLAJより一時代古い方言の反映なのであろうか。LAJは，さすがに一目瞭然の分布領域を提示している。

ダヒョー——この語は，SDJDでも，BS以外の例を引いていない。盛岡城下の学のある人の冗談に近い造語かなどと考えたこともあったが，SDJDはタルヒの関連語形としてタッペ（埼玉県秩父郡，神奈川県），タッペー（千葉県葛飾郡）を記録しており，LAJも岩手県気仙地方にタッペン，東京都神津島にタッピがあると報告している。何か関係がありそうに思われる（SDJDは，このほか「霜柱」の意味のタッペ，タッペーが関東から静岡県にかけて使われていることを教えるほか，関連語形としてのタッピョーが神奈川県中郡で使われていると記録していて興味深い。ダヒョーとよく似ているではないか。このほかSDJDは「雪道などが凍って滑らかになった所。また，一面に張った氷」の意味のタッペ，タッペーを記録し，この場合は「氷柱」や「霜柱」をさす場合とは違って，その使用地域が岩手，宮城，福島，山形，茨城の各県から，東京都大島，静岡県に及ぶとしている）。

タルヒ——SDJDでは，岩手県，宮城県玉造郡，仙台市，福島県北部，福島市，東京都八王子，新潟県佐渡，三重県阿山郡，佐賀県をその使用地域としている。関連語形のタッペ，タッペーの分布については，前項のダヒョーの項で言及したのでそこを見てほしい。SDJDはそのほかの関連語形として，タラヒ，タリヒ，タルキ，タレヒ，タロキ，タロシ，タロヒ，タロベ，タロッペ，タロンペなどを挙げている。そしてそれらは岩手，宮城，福島，秋田，山形，新潟（佐渡），石川，福井，熊本（主として天草），長崎の各県で使われているとする（「霜柱」の意味の各表現の使用地域，「雪道などが凍って滑らかになった所。また，一面に張った氷」の意味の各表現の使用地域は，ダヒョーの項で引いたものがほぼすべてである）。

LAJでは，タルヒおよびその類の語が，青森，福島の一部を含む岩手，宮城の両県にまたがる地域を中心領域としていることをはっきり示している。そして，秋田，山形，新潟（佐渡），富山，石川，福井，長崎，熊本のものなどはそれらから切り離され，それぞれの勢力は中心領域にくらべ

ていずれも微弱なことが見てとれる。

以上をまとめれば次のようになろうか。BS が的を射ていることは，まさにそのものずばりである。SDJD における三重県や佐賀県に関する情報は，LAJ より多分古い時代のものとすべきなのであろう。LAJ が明快なのは，他の場合と同じである。

スゴーリ——SDJD は，スゴーリについては BS を引くのみであるが，スゴリが福島県耶麻郡に，スグリが福島県会津，長野県に，スングリ・スグリンボが長野県に，スグリンボーが長野県上田に，スグレンボー，スグンダレ，スクンダレが長野県筑摩郡にあるとする。福島県と長野県の 2 地域でこの類の語が使われているというわけである。

これに対して LAJ も，福島県にスゴーリ，スグリ，シギリが，長野県にスグリ，スグリンボー，スムリが分布しているとする。

地図でみると極めて力の弱い，しかし 2 か所にそれぞれまとまった領域を持つこの類の語を，SDJD は当然にしても，BS が 2 地域ともきちんと採録していて，改めて敬服する。そして 200 年前の方言と1950～60年代の方言の思いがけない一致に驚かされる（200 年前にはさらに各地で用いられていたが，たまたまそのうち 2 地域が BS に記録され，そしてそのたまたま記録された 2 地域が，他が消失する中でこれまた偶然に 200 年後も保存された，などということはまさかないであろう）。

ホダレ——SDJD では，その使用地域を福井県敦賀郡，滋賀県，佐賀県唐津市，熊本県，大分県大野郡とする。そのほかホーダレ，ホータレが石川県能登で，ホタレが滋賀県で，ホンダレが滋賀県愛知郡，蒲生郡で，ホンダラが滋賀県神崎郡で，ホダラが熊本県で，ホララが熊本県天草郡で使われているとしている。

これに対して LAJ は，ホダレの類が福井県敦賀付近，滋賀県，佐賀県伊万里市付近，熊本県，大分県直入郡，鹿児島県出水郡，伊佐郡に分布しているとしており，その領域が SDJD とほとんど一致していることがわかる（SDJD では能登にホーダレ，ホータレがあるとするが，LAJ ではボーダレのみとしている）。

結局現在のホダレの領域は，滋賀県を中心とするもの，熊本県を中心とするものがあり，そして佐賀にも飛地があるということになる。BS が，このあまり勢力の強くないこの類の語の存在を，スゴーリの場合と同様に，滋賀県と九州の2地域についてきちんと捉えていて，不思議ささえ感じさせる。石川県能登地方の SDJD と LAJ の不一致は，いずれも原典（SDJD の出典，LAJ の原カード）にもどって検討したい。SDJD の大分県大野郡のものは，LAJ のものより1世代古いものの記録であろうか。なお SDJD と LAJ がともに佐賀県の小分布領域（LAJ の場合は2地点）をきちんと記録しているのは，両者の刊行に関係したものとして，まことに嬉しい気分である。

トロロー——巨視的には，当然ツララと関係のある語である。SDJD では，トロローについては BS を引くのみであるが，関連語形としては，トロロが千葉県で，トトロロが千葉県香取郡で，トロコが千葉県印旛郡で，トコロが千葉県山武郡で，トルルが神奈川県高座郡で，ツロロが茨城県新治郡で（別に広島県能美島，江田島でも），ツルルが神奈川県津久井郡で使われているなどとしている。

LAJ でもトロローは見られないが（原カードにはあるかもしれない），千葉県北部に12地点トロロがまとまっているほか，周辺の千葉県匝瑳郡にはトーローが，千葉県千葉郡にはトーロンボーが，茨城県行方郡，稲敷郡にはツトロが，茨城県北相馬郡にはツロンボーが分布し，そのほかツルルが神奈川県以外に茨城県や伊豆半島にもあるとしている。ツロロにいたっては，東京都西部のほか，三重県の北部と南部，さらには長崎県五島地方にもあるとして（広島県にはない），この点では SDJD と多少のずれを示している。

BS のトロロー（トロロの変種と見る）を基準とすれば，BS と SDJD と LAJ は，まさにぴったり一致していると言っていいであろう。BS は，ここでも珍しい語をよく捉えている。トロロー周辺の関連語形について SDJD と LAJ との間に多少の差が見られるが，今後の検討課題となる。関連語形間の動揺が全国各地でそれぞれ起こり，いまもそれが続いている

と見るのであろうか。さらに考えてみたい。

ボーガネ——SDJD は BS を引くのみで，他の根拠を示していない（SDJD では，静岡県浜松市で使われているボーゴーリをこのボーガネの関連語形とするが，問題があるかもしれない）。しかし逆転形と見られるカナンボーについては，栃木県，群馬県邑楽郡，埼玉県，三重県桑名市を使用地域とし，その関連語形のカナンボについては，群馬県山田郡，三重県をその使用地域として掲げて，関係のあることを窺わせている。

LAJ では，栃木県足利市，群馬県桐生市，太田市，群馬郡，新田郡，邑楽郡（計6地点）と三重県（計7地点）にカナンボーが分布していることを示している。LAJ をみると，関東の場合，カナンボーの領域の周辺にサガリンボーやアメンボーやコーリンボーなどの表現が見られ，あるいは類推によって元来の BS が記録するボーガネが逆転してカナンボーなる現在の形に変化したのではないかという想像を生む。

総括すれば，BS の示す語形の現存しないのは残念であるが，手掛りが全くないわけではなさそうに思われる。SDJD と LAJ とは，三重県の領域を含めてほぼ一致していると言っていいであろう。

カナゴ——SDJD は，BS を引くほかは岐阜県を使用地域として挙げるだけで，伊勢の白子（鈴鹿）付近におけるこの語の現在の使用は報じられていない。三重県松阪でカナゴリ，愛知県海部郡でカナゴーリが使われているとするが，何か関係があるのだろうか。別に島根県能義郡には「氷」の意味のカナコーがあるとする（LAJ 216の「氷」の図にも島根県仁多郡にカネコーがある）が，これは直接の関係はなかろう。

LAJ では，カナゴが岐阜県大垣市と海津郡に2地点分布している。これも白子からはやや遠い。LAJ では三重県鈴鹿市や愛知県津島市にカナコーリがあるとするが，これらは，具体的には SDJD が示唆するように，原典にもどればあるいはカナゴーリやカナゴリであるのかもしれない。

BS のカナゴは，いまひとつはっきりしない。200年前には三重県北部から岐阜県南部にかけてかなり広く分布していたのに，現在にいたって岐阜県のもののみが残り，三重県のものは消えてしまったとでも言うのだろ

うか。さらに考えてみたい。SDJD と LAJ は，さらに原典にもどって吟味する必要があるが，大体のところは一致していると言ってよさそうである。

ボンダラ——SDJD は，この語の使用地域を，BS 以外では単に山形県としているのみである。関連語形としてボダラ，ボーダラ，ボダラゲ，ボンダラゲ，ボンガラ，ボンダンガラ，ボーダンガラ，ボダガラ，ボンダガラ，ボタンガラ，ボンタラカラなどを挙げているが，このうちボンダラにもっとも近いものは，山形県東村山郡を使用地域とするボダラであろう。その他の諸語形は，ボーダラについて石川県金沢市，静岡県田方郡をも使用地域とするほか，すべて山形県，それも東・西置賜郡で使われているとしている（なおSDJDではこのボンダラをすでにとりあげたホダレの関連語形として扱っているが，語形の上からも地理的にもいささか離れたものと考えていいであろう）。

LAJ では，ボンダラの分布領域として山形県村山地方（北は尾花沢市，東は東根市，南は上山市，西は西村山郡）の12地点を提示している（ほかに北海道紋別郡遠軽町に1地点見られる）。関連語形としては，山形市と西置賜郡にボンガラが，東置賜郡にボンダンカラが，西村山郡にボーダラが見られるぐらいである（なおこのボーダラは，このほかボーダレの領域内の石川県鳳至郡に1地点，福井県敦賀市と滋賀県神崎郡に各1地点，それぞれかなりかけ離れて分布している）。

まとめると，BS がその使用域を最上地方とするのは，現在の分布からするといささかずれているということになる。LAJ で見ると現在最上地方に分布しているのはスガである。200年前にはボンダラの領域が北村山郡の尾花沢の北の最上地方にまでひろがっていたのに，その後スガの勢力が南下してきたとでも言うのであろうか。さらに考えたい問題である。SDJD と LAJ を比較すると大差はないようであるが，同じ山形県内ではあっても，SDJD のほうに多様な関連語形が記録されているように見える。これはやや古い状態であって，LAJ の状況は，ボンダラに統一されていく新しい傾向なのであろうか。SDJD がボーダラについて石川県金沢市と

静岡県田方郡を記録し，LAJ が石川，福井，滋賀の各県で各1地点報告しているのは，地域差はあるにしても，それぞれ共通した問題に触れているように思われる。

6. 『物類称呼』『日本言語地図』との比較　—総括—

ここでは，カナコリからボンダラまでの10語をめぐる，BS，SDJD，LAJ 間の比較の結果をまとめてみよう。

まず BS の記録が，現在の方言から見てまことに的を射ていると見られるものが，かなりあった。すなわちカナコリ，シガマ，タルヒ，スゴーリ，ホダレ，トロローの各語形がそれである。ことにスゴーリとホダレについては，これらのあまり強力でない語形について，複数の領域がきちんと捉えられていて，不思議とさえ言えるほどであった。ほぼ200年の隔たりがあるというのに，これはどうしたことであろうか。物を思わせる事実である（「ことばの地理的伝播速度など」1972年，『現代言語学』所収の筆者として，特に気になる点である）。

以上の一致に対してカナゴとボンダラは，BS の記述と現在の方言状態との間に多少とも地理的なずれが認められ，なぜこのようなことが生ずるのか，これまた今後の検討課題となった（BS の各語の配列について，現在の方言状態とよく一致するものがまず出てきて，ずれの生ずるものが終りに近くあらわれるのには，何か意味があるのだろうか）。ダヒョーとボーガネはそのままの形では現在見られない語形であるが，全く手掛りがないわけではなさそうである。

SDJD と LAJ の比較では，大局的には両者はほぼ一致すると言ってよさそうである。たとえばホダレの佐賀県に関する記録などは，両者の驚くほどの一致を見せていた。無論多少の差はあり，その中には，カナコリ，シガマ，タルヒ，ボンダラのところで指摘したように，SDJD のもとになった資料と LAJ の資料との間の多少とも存在する時代差に由来するものが含まれると思われるふしがあった。これまた今後の検討課題である。ホダレ，トロローのところで指摘したように，その中には，SDJD について

は根拠になった方言集にもどり，LAJ については原カードにもどることによって，問題点がいっそう明らかになる可能性のあるものがあるかと思われる。

結局 BS，SDJD，LAJ の 3 者の比較はまことに有効であり，今後他の項目についても推進されるべきである，とまとめられよう。

しかし問題がないわけではない。LAJ を基準にすると，「氷柱」をめぐって BS になぜ載っていないのか，首をかしげたくなる語がいくつも存在するのである。秋田のタロッペ，福島から栃木にかけてのサガンボー，福島，関東，長野，山梨に広いアメンボー（BS の著者は越谷の出身と言うではないか），群馬や山梨に見られるコーリンボー，石川，福井のタルキ，タンタルキ，福井，滋賀，島根，広島のナンリョー，島根，広島のシミザエ，シンザエ，山口と鹿児島のシモロ，スマル，福岡，佐賀，大分などのマガンコ，モーガンコ，佐賀，長崎のタルミ，タロミ，大分のヨーラクなどがそれである。この中には，採録されたシガマやスゴーリやホダレなどよりずっと使用地域の広いものがある。BS はどのようにして当時の各地の方言を集めたか，この事実からそれをさぐるなんらかの手掛りがえられそうである。

また，ここでは BS が記録している語形を比較の基準にしたこともあって，SDJD と LAJ の比較が十分でなかったことが反省される。上記のタロッペからヨーラクまでの語ではどうなのか。しかしもはや紙数も尽きたようである。これも今後の課題ということになるが，現代に生きる日本語研究者としては，『新撰字鏡』と『倭名類聚抄』と『類聚名義抄』と『色葉字類抄』の比較が行われるように，あるいはそれ以上盛んに，SDJD と LAJ の比較が行われてしかるべきだと筆者は思うのであるが，いかがなものであろうか。

7. 孤例　—結びにかえて

以上は，実は1990年 5 月26日の明海大学における国語学会の春季大会で行った講演の前半部を手直しして文章にしたものである。冒頭に掲げた多

彩さと活力を示す語は，その場のために選んだものであった。後半部ではいわゆる孤例についていささか言及した。つまり方言の語彙は多彩には違いないが，その多様性に分け入ると，広大な分布領域を持つものがある一方，方言地図について言えばたった1地点にしか見られない，いわゆる孤例も結構多いという問題を話題にした。SDJD に移してみれば，ただ一種の特定の文献だけを根拠にして登録されている語形が，ほぼこれにあたると言えようか（それらの語形は，全見出し語のうちおよそ70%を占めているようである)。そういう事実を指摘する文献も過去にないことはないが（徳川宗賢「言語地図における孤例」1973年，『ことばの研究』4　所収，沢木幹栄「LAJ の語形の数量的性格」1988年，『方言研究法の探索』所収など)，講演の時には LAJ の「擂粉木」「蜥蜴」を例にして，問題点を紹介した。もはや紙数もオーバーしているので，その内容の概略は第5図によって推察していただきたい。

地図名	擂　粉　木	蜥　　蜴
LAJに見られる語形の種類	54	220
そのうちで多数の地点に見られる語形	スリコギ， スリコギボー， レンギ，メグリ， メグリボー， マワシギ	トカゲ，トカケ， トカギ，トカキ， トカギリ，トカキリ， カナヘビ， カガミッチョ， カマギッチョ
1地点からしか回答のなかった語形の数	24	132
それの全体の中での割合	44.4%	60.6%

第5図

この孤例の問題は，方言量の問題と関連して，方言の語彙を考察する際の大切な興味深い観点である。

この文章全体を総括して，ひとことで言えば，方言の語彙の研究は，まだまだ未開拓な部分が大きい，SDJD なる手掛りが出たおりから若い人々に期待するところが大きい，ということになろう。それがこの文章を公表する目的でもあるし，講演をしたときの気持ちでもあったのである。

(1990.11.27)

注

1) このヨダケルについては，山口佳紀氏から．五段活用ならヨ（弥）ダケル(猛)のように理解できるが，下一段活用の場合はシラ・ケルやダラ・ケルに準じてヨダ・ケルのように理解するのが自然ではなかろうかという御意見を戴いた。

2) なお，比較資料として『標準語引分類方言辞典』によって知ることのできる方言量の多い標目を，これも60番目まで示してみた。第2表を見てほしい。ただし，この辞典は SDJD と違って代表語形を示していないので，カウントの原則が多少とも違っていることを注意してほしい。具体的な対照のために，それぞれの辞典の「おにごっこ（鬼事)」の部分を，第6図・第7図として提出した。

3) 以前林大氏から，方言語彙の総量ははどのくらいあるのかと問われたことがある。その時はとっさに何も答えられなかったが，この第3図のグラフを手掛りに，何らかの回答ができそうな気がした。もっともいまはそれ以上には一歩も進むことができない。つまり，もはや若い方々にゆだねなければならない，ということになる。

1	対称代名詞（178）	20	娼婦（83）	40	小さい（63）
2	蝸牛（174）	22	お転婆（80）	40	巫山戯る（63）
3	目高（154）	22	梟（80）	43	下水（61）
4	沢山（147）	22	彼岸花（80）	43	親類（61）
5	蟻地獄（143）	25	崖（78）	45	胡座（60）
6	片足跳び（136）	25	台所（78）	46	鬼事（59）
7	蟷螂（129）	27	虎杖（77）	47	兄（58）
8	蟇蛙（127）	28	怠け者（76）	48	うずくまる（56）
9	お玉杓子（120）	28	非常に（76）	48	すねる（56）
10	馬鹿（116）	30	父（74）	50	山頂（54）
11	水澄まし（106）	31	叱る（73）	50	私生児（54）
12	馬鈴薯（99）	31	鶺鴒（73）	50	蝶（54）
13	痘痕（92）	31	殴る（73）	53	蝗（52）
14	飴ん坊（91）	34	赤ん坊（70）	53	肩車（52）
14	お手玉（91）	34	吝ん坊（70）	53	旋毛（52）
14	氷柱（91）	36	何時も（67）	53	玉蜀黍（52）
17	嘘（90）	36	自称代名詞（67）	53	蜥蜴（52）
18	主婦（87）	36	夕方（67）	53	便所（52）
19	母（86）	39	河童（65）	59	焦臭い（51）
20	蟋蟀（83）	40	菫（63）	59	乞食（51）

第2表

おにごっこ（鬼事遊）㊟おいだご・おいつけおに・おいのやま・おいみきて，おいやい・おくりご・おこなんじょ・おっこなんじょ・おにおに・おにかいな（おにおに）・おにとり・おにのさら・おにぶくろ・おにわたし・おにんぶくろ・およんば・おわいがち（おわえこ）・おわえこ・おんかいぼ・おんじょ・おんなんご・おんぼ・かっつこ・かっぽ・ことろことろ・さめ・さよ・つかまえぼ・でーこ・にげもーも・ぶくりがいち・ぼいっこ・ぼいやい・ぼいやこ（ぼいやい）・ぼーやい・ぼーやこ（ぼーやい）・ほた・むかえぼ・めっとろまい・もー・もーも・もーや（もーも）・ゆーらっこ・㊟おこなんご・おにこぼこり・おにごま・おわいおに・おんこどい・おんにゃっこっこ・かつぃみんしょーれー・きーきりもん（児）・しんげき・たかごと・つかみおに・ぶぐれっこ・ぼいせい・ぼろんこ・ぼんやこ・まくりやんこ。

（標準語引分類方言辞典）

第6図

おにごっこ【鬼ー】あげぇけぇ／あたりばば／あら／いかしおに／いっちく／いんば／ういっくなー／うーおにんぎょー／うーとりがち／うこ／うまーや／うまや／えーえー／えっとばっけ／えやばっぱ／えんこーい／えんさ／おあんじょ／おいかけやい／おいかけやこ／おいくらごー／おいこ／おいこーい／おいさげやこ／おいだご／おいつきごく／おいつきやい／おいっくら／おいつけおに／おいっこ／おいどりがち／おいどんこ／おいなんご／おいのやま／おいぼ／おいまわしゃい／おいやいみきて／おいやい／おいやいこ／おいらがち／おー／おんじょ／おーんぎょ／おーんご／おくりご／おこなじょ／おこなんご／おこなじょ／おさえ／おさえおに／おさえかご／おさえくふぁ／おさえくら／おさえくらご／おさえこっこ／おさえこんぼ／おさえっか／おさえっこ／おさえっぽち／おさえやい／おさえやいこ／おさえろかご／おせくら／おっかけおに／おっかけっこ／おっかけなんご／おっかけも／おっこなんじょ／おっぱえこ／おてこい／おに／おにあい／おにおさえ／おにおっこ／おにおに／おにおかい／おにかいかい／おにがいけ／おにかいな／おにかえご／おにかぇっこ／おにがく／おにがち／おにがっこ／おにかや／おにかわ／おにぎょ／おにぐま／おにくら／おにくらご／おにけな／おにげな／おにげんぼ／おにこ／おにごー／おにごく／おにごちゃ／おにこっこ／おにごっちゃ／おにこっちょ／おにごと／おにこなんしょ／おにこなんじょ／おにこなんちょ／おにこぼい／おにこぼくり／おにこぼこり／おにこぼっち／おにこま／おにごま／おにごまいこ／おにさ／おにさご／おにさら／おにさらこー／おにさん／おにさんこ／おにさんぼ／おにさんよんご／おにしぇめ／おにじょっこ／おにっこ／おにっこっこ／おにっこと／おにど／おにどち／おにどっこ／おにどの／おにとり／おにどん／おにどんこ／おにとんぼ／おになか／おになご／おになっか／おになんこ／おにのさら／おにのばっけー／おにばっけー／おにばんこ／おにびらっこ／おにふぐり／おにぼくろ／おにぼい／おにぼくり／おにぼっちょ／おにぼっつ／おにもっこ／おにやい／おにやいこ／おにゃおにゃ／おにやっこ／おにゃもっこ／おにわし／おにわたし／おにんぎょ／おにんぎょー／おにんご／おにんこー／おにんご／おにんじょ／おにんど／おにんぼ／おにんぷくろ／おはいんこ／おやおに／おやかー／おややっこ／およんぼ／おりんど／おわいがち／おわいごこ／おわいこみ／おわいて／おわいてごんご／おわいてごんじょ／おわいやこ／おわえ／おわえー／おわえおに／おわえぐらごー／おわえこ／おわえこー／おわえこく／おわえごくら／おわえごっこ／おわえこと／おわえこんご／おわえさん／おわえっこ／おわえもー／おわえものや／おわえやーこ／おわえやい／おわえやいこ／おわえんご／おわえんぼ／おわかけやい／おわれ／おわんじょ／おん／おんかいぼ／おんがろし／おんきゃ／おんけこ／おんこ／おんごじ／おんこどい／おんさごい／おんじ／おんじょ／おんずら／おんだ／おんだれご／おんつかえ／おんつけ／おんどー／おんどち／おんとり／おんどんご／おんなんご／おんなんごっこ／おんにゃっこ／おんにゃっこ／おんのことり／おんのことり／おんぱおに／おんまー／がおまお／かぐじょっこ／かくねこ／かくねんぼー／かくべ／かくれ／かくれおに／かくれおみ／かくれがい／かくれこ／かくれご／かくれごと／かくれんぼ／かくれんぼー／かたちんば／かつぁみっくなー／かついみんそーれー／かっこ／かっつこ／がに／きーきりもん／きりおねんじょ／ごっこ／さめ／さよ／しまいかご／しめくら／しめっこ／しめっくら／しめっこ／しめらおに／しめらばんこ／しめらぼち／しめらぼっち／しめらぼっち／じゃどい／じゃといごと／しょいかご／しんげき／しんごき／じんじ／せめくら／せめこ／せめごと／せめこら／せめっくら／せめっこ／せめっこら／せめばんこ／せめらかんご／せめらぼっぽ／せめんこら／たかご／たすけ／つかまえ／つかまえおに／つかまえぐらごー／つかまえこ／つかまえごこ／つかまえこ／つかまえごと／つかまえじょこ／つかまえなんど／つかまえぼ／つかまえやい／つかまえやこ／つかみ／つかみあい／つかみおに／つかみごくら／つかめ／つかめこ／つかめやい／つかめんこ／つかめんぼ／つけおん／つけがち／つらまえごくら／でーこ／でんごと／とーらいとらんぎょー／とりこ／にげおに／にげこ／にげっこー／にげのこ／にげもも／ぬかご／はしりご／ばっけぇ／ばんげーし／はんや／ひきだか／ふかなんこ／ぶくりがいち／ぶくりっこ／ぶぐれっこ／へめくら／へめこら／ぼいがち／ぼいくさご／ぼいくふぁ／ぼいくら／ぼいごっこ／ぼいざっこ／ぼいぞく／ぼいっくら／ぼいっこ／ぼいっさげやこ／ぼいっさげやこ／ぼいどく／ぼいねんぼ／ぼいぼい／ぼいやい／ぼいやいめんぼ／ぼいやー／ぼいやい／ぼいやいこ／ぼいやこ／ぼえーこ／ぼえちゃげやこ／ほーえ／ぼーけり／ぼーさー／ぼーさん／ぼーやい／ぼーやこ／ぼーれ／ほた／ぽっかけくらこ／ぽっけん／ぽっけんっき／ぽっさげこ／ぽっさげやこ／ぽっしゃげこ／ぽりげこー／ほろんこ／ほんちょばっけ／ぽんやい／ぽんやいこ／ぽんやいち／ぽんやこ／ぽんやっ／ぽんやっこ／まくりばば／まくりやんこ／むかえほ／めいのち／めくさん／めくさんお／めくらお／めくらおに／めくらかご／めくらさんじょ／めくらぼっち／めくらぼっつ／めくらんぼ／めくらんぼー／めっとろまい／めはんほ／もー／もーごい／もーもー／もーもーご／もーや／やかんさ／やったご／やりおに／やりおにどん／やりおん／やりおんど／ゆーらっこ／よしよし

(SDJD)

第7図

（文学部日本学科教授）